

太平天国とドイツ農民戦争

——社会的基盤の相違について——

小 島 晋 治

私は太平天国研究を始めて暫くの間は、太平天国運動はドイツ農民戦争と非常に共通点をもっていると考えておりました。ドイツ農民戦争については、本格的な研究を読んだことはございませんで、もっぱらエンゲルスのドイツ農民戦争を読みまして、ミュンツァー派の、再洗礼派の運動の特徴が、非常に太平天国の運動と共通している面があると長く考えていました。どういう点かといいますと、強烈な現世秩序の否定の精神と、永久的な救済への指向という点、それと関連する非常に厳格な禁欲主義思想というのがある。多かれ少なかれ、中国の宗教的性格を持った反乱には禁欲主義思想があるのですが、特に太平天国の挙兵の初期には、非常に強烈な禁欲主義思想がありました。酒は飲まない、タバコは吸わない、博打はやらない。それからセックスについてのたいへんに禁欲的な戒律がある。それは同時代の中国の他の様々なセクトと対比してかなり際立った特徴でありました。それから原始的あるいは農業的な共産主義といえますか、共有制という点で、ミュンツァー派のものと太平天国はひじょうに共通している、と思っておりました。

この点は私がそう思っただけではなくて、既に太平天国の同時代にロンドン伝道教会のミルンという宣教師が中国に布教に来ておまして、この運動に非常に注目しておりました。当時、ロンドン伝道会だけではなくて、中国に来ていたプロテスタントの宣教師の間では、太平天国を通じて中国がキリスト教化するのではないかという期待がありまして、そのために南京に行って教会を作ろうとした動きや、太平天国の占領地にそれを作ろうという動きもありました。しかしミルンはそれを非常に厳しく批判する。この運動に中国のキリスト教化の期待をかけるのはまったく無益なことである、というのが彼の考え方です。彼は、この太平天国運動はミュンツァー派の運動とひじょうに共通な性格をもったものである、と言っております。これは大英博物館のオリエンタル・ライブラリーにあります、エディンバラ・レビューという、1855年のものに載っている、“Political Disturbance in China” という表題をもった文章でして、彼はこう書いている。「ヨーロッパでも 13、14 世紀に、太平天国運動と同様に神秘主義的セクトによる宗教的、社会的狂信の爆発があった。ファナティシズムの爆発があった。ヨーロッパでは彼らの極端な血なまぐさい行動の痕跡は、久しい以前に消滅した。しかしそれらは疑いもなく、

封建制度の厳酷な諸制度や社会の不寛容な諸条件、腐敗した聖職者たちの過酷な税金徴収に対する、人間の恨みつらみの爆発であった。16世紀の再洗礼派の運動は同じ傾向のより明確な例であって、ミュンツァーがその予言に託した狂信は、太平天国の常軌を逸した洗神的な主張を想起させる。彼らは共通に、キリスト教の言い伝えを人間の極端な振る舞いと混同し、両者ともに人間のパッションをそそのかし、共通に財産所有に対する悪意を持ち、共通に神から直接にインスピレーションを得たのだと主張した。しかしこれらの災厄は一時的なものにすぎない」と。ミルンは、再洗礼派と太平天国の運動を重ねて論じて、否定しているわけです。

ミュンツァーが直接に神からインスピレーションを得たというのは具体的にどういうことか、よく僕にはわからないところがありますが、洪秀全の場合には、科挙に失敗した時に夢に天使が現れて、そして天上に導かれて、そこで神の教えを伝えられたということがある。後になって、挙兵して清朝を倒し地上天国を樹立するという「革命」運動に転換していくと、彼は「上帝」から直接この使命を与えられたと主張します。「上帝」という言葉を彼は使うわけです。当時キリスト教の宣教師たちにとって、Godについてどういう訳語を使うかということが非常に問題でした。カソリックの場合は天主という言葉を使う。それで、天主教というわけです。プロテスタントの場合には皇上帝とか、神天上帝、神の天の上帝という言葉を使う。上帝という言葉を使いますと中国人には抵抗がない。昔から中国には最高神としての天の主宰者の上帝という考え方がありますから、それで上帝という言葉を使う。秀全は初期の中国人プロテスタントの書いたキリスト教の解説書を読み、これを自分が見た夢と結びつけて上帝教という一神教を創始した。そして、上帝から地上の邪悪を一掃して人々を救えという使命を得たんで、自分はキリストの弟なんだという主張をするようになる。初期の信徒の一人に上帝が乗り移り、続いてもう一人にキリストが乗り移るということがあり、秀全は彼らをつうじての上帝とキリストの託宣を受け容れた。これは付体といいまして、中国の農村部には、神々が人間に乗り移ってその意思を伝えるということが近年まであるわけです。日本の幕末の時代にも、例えば天理教だとか、如来教だとか、黒住教の創始の場合に、女性の創始者に神が付体するということがありました。中国の場合にはそれが反乱と結びつきました。神から命を受けるというのは、皇帝になるということなんですね、中国の文脈では。それで彼は、地上の真の君主たるべき命を上帝およびキリストから得たと主張するようになる。当然キリスト教からしますと、とんでもない洗神的な主張だということで、後になりますと、ヨーロッパから来た宣教師たちはその点をひじょうに厳しく批判するようになる。

しかし、最初は彼は上帝やキリストから地上の「真主」たれという命を受けたとは思っていませんでした。例えば、ロバーツというアメリカのプロテスタントの宣教師が広東で開いていた教会に彼は行くわけです。自分が夢を見た後です。その時にロバーツは、アメリカにいる自分の友人に手紙を書いていまして、洪秀全が不思議な体験を語ったと。この体験は、使徒行伝の第10章に載っているコルネリオの体験したものとまったく同じであって、そういう同じ奇跡がこのアジアの地に実現したことに驚いた、とロバーツは書いている。そうしますと、洪

秀全が最初に夢を見た時には、別にキリストあるいは上帝から救済せよ、地上を救えという使命を受けて、しかも自分はその弟であったということは語ってない。語ったとすれば、ロバーツはとても受け入れるわけがない。ですからそれは後になりまして、彼が布教のために広西の農村に入っていった時に、そこはかなり野心的な農民に神が乗り移って言った言葉を受け入れたのがきっかけになって急速に変質していったのだと思います。しかもそういう形で彼は直接に神のインスピレーションを受けたとアピールした。しかもミルンが語った段階ではすでに「おれはキリストの弟である。」といているわけですから、ミルンからすればとんでもない主張でしょう。ミュンツァーはそういうことを言ったわけではないと思います。しかし先に述べたような点で非常に共通だとミルンは見えていました。私もそのように長く考えてきていた。エンゲルスの著作以外にドイツ農民戦争について読む機会がなかったものですから。

たまたま先程倉塚さんが言われましたとおり、それから今バツクルさんが言われたお話の中でも取り上げられましたブリックレの著書『1525年の革命——ドイツ農民戦争の社会構造史的研究』の訳書を読みまして、共通性よりは違いの方がはるかに多いと思うようになりました。この本では、たしかあまり再洗礼派そのものの分析はしていないので、その点がどうなのかな、という疑問は残りました。しかし彼は1525年の農民戦争の起点で、西南ドイツの上シュヴァーベンで三つの農民軍団が集まって、これに改革派の聖職者が加わって十二箇条の要求書をつくった、この要求書こそがドイツ農民戦争の原理的な枠組、または農民の諸要求を集約したものだとして述べて、その全文を挙げて詳しく分析しています。これがドイツ農民戦争のいわば原理的な枠組みを代表するものだとすると、例えば太平天国の場合の運動の要求、スローガン、それから運動のあり方というものとは非常に異質である。かなり根本的に異質だということを感じました。

まずどういう点が異質かと言いますと、その要求書の冒頭では、「聖と俗の権力によって苦しめられていると感じている、その支配下にある、すべての農民と隷農の基本的にしてかつ正当なる主要箇条」というふうに冒頭に出てくる。ここがまず、太平天国を含む中国の反乱にはでてこないんです。十二箇条は明確に農民としての立場から、農民としての要求を正当なものとして提起してる。ところが、この太平天国を含めて、旧来の様々な中国の大規模な反乱の中で、こういう農民としての要求、正当な要求としてそれを掲げて、これを実現するために、既存の王朝に戦いを挑むという形で出てきたものは、どうもないんです。ほくの知っている限りはない。中国の農民戦争という言い方自身エンゲルスの『ドイツ農民戦争』から、恐らくその言葉を借りてきたもので、それほど新しい言葉ではない。かつては、「農民起義」とか、日本では農民一揆、百姓一揆といいますけど、中国の場合には、「農民起義」、つまり農民が義を起す、正義の戦いを起すという、そういう言い方をしていました。つまり農民反乱のことで

中国では秦の始皇帝時代の陳勝・呉広の反乱以来、王朝末期には、しばしば大規模な民衆反乱が起きる。これには様々な民衆が含まれている。農民だけに限られない、むしろいわば脱農

民化した部分がかなり多い。それが繰り返し起きる。中国の歴史家たちは、例の劉邦とか項羽なんかも、こういう一種の農民蜂起のリーダーとして捉える。それから、明朝を起こした朱元璋なども元末の紅巾の乱という大民衆反乱から生まれている。この明自身も、李自成という陝西から起きた反乱の指導者によって倒される。この李自成は満州族の清朝軍のために打ち破られて、新しい王朝はつくれなかった。これら繰り返し起こった王朝末期の民衆反乱を全部農民戦争という言い方をするようになってきたんです。農民の闘争が中国史の発展の原動力であり、自分たちの革命はこの伝統を受けつぎ、プロレタリアートという新しい階級の指導によって、これを勝利に導くのだという毛沢東主義の考え方から、この名前がきた。そのモデルとして、漠然とドイツ農民戦争が考えられた。

確かに現象的にみますと、中国の王朝末期の反乱は、全国に広がるような、ものすごい大規模な反乱になる。反乱の過程でどんどん広がっていく。それに、かなり高度な反乱組織をつくって、古い王朝に戦いを挑んでいる。農民戦争というのですが、しかしそれらには終始、農民として、という要求はないんです。農民を苦しめている悪しき官僚、それから天命を失った皇帝を打倒する、というものはある。そして新たに天命を受けた新皇帝によって農民の暮らしを上から安定させるというものはあるけれど、自らが農民の代表であって、農民としての要求だ、というのではない。太平天国にもない。

次に十二箇条の場合、その正当な具体的な内容としては、第一に新しい福音の教義と結び付けて、村落共同体自身によって、司祭を選任することが要求されている。これも今の話の中にもありました。そしてそれは神の法である、神の法としてそのことを要求している。つまり、上層の教会が今まで司祭を任命してきたことを拒否して、共同体が任命することを要求した。これは今風に言うと、民主の要求だ、とっていいと思います。それから第二に、教会が村落共同体の農民から搾取している十分の一税を廃止して、村落内部で使う。十分の一税は自分たち自身で決めて徴収するというのが第二条に出ている。第三に領主への賦役を軽減して農奴制を廃止する。第四に、聖と俗の領主が徴収している死亡税を廃止する。第五に、牧草地、河川、狩猟地、森林、共同牧草地、共同耕地を村落共同体に返還する、とつづいてくる。そうみてゆきますと、この要求とは、領主の権限を排除して、これを共同体の権限に移して農民の自治を拡大する、ということの意味している、と思う。さらに、こうした村落共同体が、一種の誓約同盟を結ぶ形で、新しい国家、すなわち領主制領邦国家に変わる新しい政治体制、つまり農民の国家というものを構想している、ということが、この「十二箇条」から言えることではなからうか、と思うわけです。

そこから、集約できる農民戦争という歴史概念は、次のようなことになるだろうと思います。第一に、農民が農民であり続けることを前提として、自分の地位を改善するために、端的に言えば、自らを封建権力から解放するために、農業制度や土地制度を改革する、これが第一に農民戦争の内容としてある。第二には、その実現を長期に渡って保証するための、農民自身の政治権力を樹立すること。第三に、それを受け入れない封建権力に対しては、自らが連合して組

織した武力をもって戦う、ということだと。先程もありましたけれども、こういう要求を全ドイツ的に実現するというのは、これはおそらくひじょうに難しいことで、ある一定の地域的な限界性というの、当然もつだらうと思います。しかしこの「十二箇条」の要求からそういうことが言えるのではなからうか。

他方中国では、非常に大規模な民衆反乱が王朝末期にはくり返しあって、中国の歴史家たちは、とりわけ太平天国というの、古い形式の農民戦争が最高度に発達したものであるという、歴史的規定を与え続けております。古い形式というの、彼らは、中国革命を実現した毛沢東たちの革命を、新しい形式の農民戦争と位置づけている。つまりそれは、彼らの言葉から言えば、プロレタリアートが指導する——プロレタリアートというの、実際は中国共産党が指導するということですが、一つの明確な理論をもった、プロレタリアの代表政党によって指導されている農民戦争だ、と位置づけている。そうじゃないから旧式と言う。しかし、それが最高度に発達した太平天国の場合でも、ドイツ農民戦争と比べると、ひじょうに際立った違った特徴をもっている。第一には、ドイツの場合には、村落共同体に基礎を置いて、そこに生きる農民としての立場から、先に挙げた要求を正当なものとして提出し、これを実現するために、戦争に参加しているわけです。ところが、太平天国の母体になったのは、拝上帝会という、上帝を拝する宗教的結社でした。彼らの上帝というの、多分に中国の上帝概念、天帝概念を引き継いでいるのですが、ただしこれは、唯一の神です。中国古来の上帝は、最高の神ではあるが、唯一神ではない。それを、キリスト教の布教師の書いたパンフレットを読んで、唯一の神である、と考えるに至った。この点で異なっているがこの上帝を信仰する会として、「拝上帝会」という、一種のセクトをつくる。これはひじょうに明確なセクトというわけでもないのですが、上帝を信仰する者の組織である。これが母体になるわけです。彼らは蜂起する場合には、村に生きる農民であることを放棄して参加するんです。そして、天父上帝によって、天下万国の本当の主である、主人公であるとされた天王洪秀全の作ろうとする新王朝の「官」となることをめざす。中国の中華思想においては、中国の皇帝というの、天子、つまり世界の主であって、単に中国という国家の主ではない。これは洪秀全にも受け継がれて、天下万国の主である、という。そういう主のもとに結集して、地上の天国をつくる、地上天国のことを、小天堂と云った。天にあるほんとうの、死後の天国は天堂であって、彼らがつくろうとするのは地上の天堂、小天堂をつくる、つまりこれが清朝に変わる新しい王朝ということです。この新王朝をつくるために挙兵に参加する。太平天国の動乱にすぐ先立って、18世紀末から19世紀初めにかけて、四川省、湖北省、湖南省の境界地方つまり華中の西の方で、白蓮教という異端宗教に結集した民衆反乱がおこった。弥勒仏がこの地上に下ってきて、ある人間に付体し、これが明王朝の皇帝の子孫を助けて、新しい王朝をつくる、というもので、ひじょうに大規模な反乱になった。白蓮教蜂起というの、非常に古い時代から、中国では繰り返されました。その根本にあるのは、末劫思想と弥勒下生信仰で、仏教の異端です。釈迦が入寂してから、何万年かの後に、終末の時代がくるという。これは上帝会にもあるんですが、白蓮教にはより強烈な終

末思想があり、その時には大災難が起きる、と説く。これは劫、というんです。末劫、大劫とか、末運という言い方もある。この時は太陽が真っ黒になって、あらゆる災害が起きる。黄河があふれ出す。主に白蓮教は、黄河流域の貧しい農民の中に広がるから、氾濫するのが揚子江ではなくて、黄河なんです、黄河が溢れだす。食べるものは何もなくなって、人間どうしが食べあう。そういう大災難が、必ず間もなくやってくる。その時に弥勒が下生して、新しい王朝を作るんだ、という。そういう反乱が18世紀末から19世紀初めに起きる。白蓮教の場合も拝上帝教と同じく農民であることを放棄して新王朝の官となることをめざして加わっている。

地域的な農民としての経済的な闘争—配付しました参考資料に挙げましたが、抗租運動とか抗糧運動、つまり土地税をまけさせる運動とか、地代を引き下げる運動というの、この時代には、かなり組織的になっており、それが地域を越えて連合する動きもあります。しかし、これがストレートに、王朝を倒す革命運動に発展していくことはなかった。王朝を倒す、という革命的な運動は白蓮教でも太平天国でも、すべてこういう宗教的異端というものが、中心になって、新しい王朝をつくるという形で行われている。その場合、参加者たちがどういう動機でこの運動に加わったのか、太平天国運動、白蓮教反乱に加わったのか、ということを明確に示す史料はそうはないのですが、いくらか残されているのを見ますと、太平天国の場合、持っている土地、家屋、お金、これらを全部処分して、共有財産(聖庫)に全部納めて、その共有財産で生活する、というのがある。これに参加しない農民が、「なんでお前たちは、そんなばかなことをするんだ。自分たちが持っているものを、全部団体に寄贈するなどということをやめるのか」というと、参加者は、「お前たちこそ、なんでまだ百姓などやっているのだ」、「こういうご時世に百姓なんかやったってしょうがないじゃないか。我々はこれによって、将来は高官になるんだ。」つまり、地位の高い役人になる、あるいは將軍になる、女は高官の奥さんとして、栄光に浴することができると、言っている。すべて、官を指向する形で、参加したということを述べている。白蓮教の場合もそうです。残っている限りでの、参加者の供述書を見ますと、根基銀といいまして、入会金がある。その額に応じて、将来の新しい王朝における官の地位が異なってくる、というので、ここに入った、という供述がいっぱいある。挙兵後も、太平天国のリーダーたちは、参加者を励ますのに、ひとつは「死ねば天国に行ける。生きていれば、新しい小天堂において、功勞に応じて、それぞれの官位を与えて世襲させる」と、参加者たちにアピールしている。この太平天国の軍隊は、初期には、死を恐れない部隊である、として鎮圧にあたった人達が非常に恐れた。彼らは死ぬことを昇天とって、ぜんぜん恐れないと。同時にこの戦いの中で死ねば、その家族には永久に高い官位を与える、しかも世襲させる、というのを、人々を励ます中心的なものにしている。つまり農民から離脱することに救いを見ていた。

一般の農民に対しては、もちろんいろんな約束をしています。貪欲な官僚を一掃して、公正な世の中をつくるとか、これは最も農民にアピールしたもののだが、三年の間租と賦を免除する、というものなどです。当時清朝は阿片戦争後で、たいへん重い税金を農民たちに課している。

しかもそれに、お配りした「抗租・抗糧」の解説に書きましたけれども、身分的な差別がある。官僚と紳士と普通の平民とでは、ひどい差別があって、重い税金の多くが普通の民に課せられている。これに対して「三年、租賦を免除する」ことを約束する。税金をとらないで政権を維持できるはずはありませんから、実際には実行されませんが、そういう形でアピールしている。農民であることを離脱して、反乱軍に入り、新たな官僚組織、軍事組織をつくった人々が、新しい国家をつくって、上から農民たち、あるいは一般の民衆によりよい暮らしを約束するという形で、この反乱は拡大していく。

しかしながら、一般の農民は必ずしも沢山は入ってこないわけです。この蜂起した軍隊がものすごく拡大していく一つの理由は、これはいつも王朝末期の反乱ではそうだったんだろうと思うんですが、村からはじき出された膨大な人々がいるわけです。村落からはじかれて流浪している。あるいはひどい遠くの地域に移住している。そういう人達が、この中国の19世紀半ばの時期には膨大に存在していた。当時の中国のこの事態を憂えた高官の言葉を借りれば、「士でもない、つまり官僚とか読書人でもない、商人でもない、手工業者でもない、農民でもない。つまりあらゆる生きる道から排除されている遊民とか流民と呼ばれる者があふれかえっている。」

これが、当時の中国の特徴だろうと思います。中国の社会構造というのは、先程倉塚さんが申されましたが、秦の始皇帝以来、王朝体制が、繰り返し繰り返し、再生産されるわけです。反乱が起きて、倒れても、同じような皇帝を頂点として官僚によって統治される官僚主義的専制王朝が繰り返し再生産されてくる。だから、総体としての枠組みは、ひどい強固に持続してきた。しかし、一方、これを構成している要素はたいへんに流動的です。まず皇帝そのものが、しょっちゅう変わっている。反乱の首領が途中で反乱を抑えるかたちで、儒家、読書人層、学者達を官僚に吸収して皇帝になり、新王朝をつくる。あるいは辺境から、清朝もそうですが、他の種族が入ってきて、軍事力で抑えて新しい王朝をつくる。ですから、皇帝というものも、一番長くて一つの王朝が続いたのが二百何十年くらいでしょうか。短い時期になりますと十年くらいで交代することがありまして、皇帝自身も絶大な権威を持つとはいえ、例えば日本のような万世一系なんというのはほとんどない話でした。だから宋の皇帝が日本から来た使者に、「万世一系でいたいんだが…」と言ったという記録が残っています。皇帝もひどいように変わるんです。天意を受ければ誰でもなれる。天意を受けたということを立証しなければなりません。

次に、皇帝の手足になる官僚も世襲ではない。決して特定の家に固定されてはいなかった。この官僚の登用の仕方は、時代によって、多少違う。それから官僚を構成するものがどこから出てくるのか、ということも時代によって多少違いますけれど、隋、唐の時代、特に唐代の後期からは、科挙試験に合格さえすれば、誰でも官僚になれる。官僚は一種の特権身分です。清朝の時代ですと、相当大きな地主でも地方の県レベルの県知事と比べたら、収入は段違いに県知事の方が多い。正規の収入は少ないが、自分の裁量で多くの税金その他、コミッションをポ

ケットに入れることができるから、富の点でも、官僚が一番多くの富を集める。権利という言葉があるが、権が利の源泉でありつづけてきた。ですから官僚は、ひとつの特権身分ですけれども、世襲ではなかった。ヨーロッパの諸侯とか、騎士とか、日本の武士のような世襲ではない。一代ごとに、少数の例外はありますけれど、科挙試験を通じて、試験に合格していかなければ、高い地位にはつけない。現実には、ひじょうに有力な宗族、配付資料に宗族についての説明を挙げておきましたが、それに属している人になるケースは多い。だいたい最低限でも、自作農の真ん中へんくらいから上でないと、いくら宗族の援助があってもだめで、小作農からなかなか一挙に官僚というのは難しかった。それにしても、原理的には、全部の階層に開かれているわけです。科挙から制度的に排除されていたごく少数の賤身分というのはあります。例えば役者なんかは賤身分です。父親が不正をはたらいて賤身分に落とされた人もいる。それから売春婦の子供。そういう少数の賤身分というのはありますけれど、あとは誰でも科挙試験は受けられる。事実相当広い範囲から科挙を受けて、そして高官に登っていく人がいる。その代わりに、官僚は自分の子供ができが悪くて、科挙試験の上の方に受からなければ、もう一代限りで終わってしまう。

それから官僚を支えているのは地主である、と一般に言われています。しかし地主というのも、決して安定した階層とは言えない。中国は古くから均分相続制なんです。どうしてそうなったかというのはわからないんですが、財産はすべて均分相続——しかし女性には相続権はなかった——で、男の子は財産を均等に分けて相続する。多少の差はあるにしても、原則としてはそれなんです。地主も自作農民もそうです。ですから、多くの男の子が生まれれば、均分相続でどんどん所有地は小さくなる。しかも土地売買が自由なんです。これも日本なども違う。おそらくヨーロッパとも違うと思う。土地が自由に売れるということがある。ですから、中には商売などで儲けて——商業は昔から発達している——それで土地を買い集めて、小さな農民から大きな地主になるものかなりいます。

太平天国の初期のリーダーになる人達は全部客家の出身、参加者も客家の農民が圧倒的です。客家についても簡単に配付資料に述べておきました。この客家の族譜などを調べてみますと、だいたい18世紀の半ば以降に広西に移ってきた人たちです。広東からこの地域に移ってきた人です。広東に梅県というところがありまして、これは客家の故郷です。シンガポールのリー・クワンユーもここの出身ですし、中国の人民解放軍の元帥の一人であった葉剣英——だいたい葉という人は客家なんです——これも梅県です。明治の初めに日本に公使館が開かれた時に、日本に来て、日本の文人たちとひじょうに交流した人で、日本について『日本国志』というたいへんに厚い日本の歴史、日本の制度についての本を書いた、黄遵憲——埼玉の平林寺に、彼の書いた詩の手稿がうまっています——かれも客家です。客家には、鄧小平を初めとして郭沫若だとか、朱徳という元帥だとか、ひじょうに多くの中国革命に大きな貢献をした人がいます。孫文もそうです。客家は、ひじょうに屈強な性格で頑張り屋だと言われている。梅県は山が多く、狭いものですから、人口が増えてきますと、各地に移住していく。客家というの

は、落ち着きのない奴だと見られている、と書かれている文献がありますが、特に客家は移動の範囲が広く、激しかった。広西では、この客家の農民が、拜上帝会の主たるメンバーでリーダーもそうです。リーダーの中には、貧しい農民として来て、商売などで儲けて、それでかなりの地主になっていった地主出身者もおります。ですから、太平天国のリーダーはみな貧しい農民とは必ずしも言えない。客家は色々な差別を先住民から受けていたけれども、経済的には、そういう形で豊かになっていたのもおります。

毛沢東の親父も、本来は貧しい農民だったのが、ひじょうに商売じょうずで、がめつくて、儲けて富裕になったといわれています。中国共産党の初期のリーダーには、もと大きな地主の家で、没落していった昔の読書人の家の出身もかなりいます。これらのリーダーたちの出自を見ても、中国の社会が大きな変動性をもっていたということがわかる。地主から科挙に合格し、高官がでますと、一挙に豊かになるが、そうでなければ、この地主も、安定していたとは言えない。日本の村だと、先頃まではどこでも昔の庄屋の家が残っていました。最近はいよいよ判らなくなってきましたが、僕の故郷の茨城でも、村に行きますと、どこでも庄屋門という立派な門をもっている家が残っていた。江戸時代に庄屋、村役人であり続けた家です。日本の場合には、嫡男の単独相続ですから、そういう本家が續いていました。これは日本の地方のエリートで、そこから日本のいろんな人材が出てきている。中国ではほとんどそういうものを見たことがない。中国の地主というのは、家から誰かが官僚が出ますと、都市に出て都市で暮らす。ほとんど農業とは直接の関係がなくなってしまう、というのが多い。こういう形で上昇するのも多いけれども、落っこちていくのも多い。

農民自身も、安定性という点では日本やヨーロッパのようなそれに欠けている。中国には村というのがちゃんとあるのか、ということがよくいわれてきた。かつて華北農村調査が、戦争中、末広厳太郎先生などを中心にして行われ、その後共同体論争というのが日本でありました。いったい中国の華北の農村に共同体があるのかないのか。ないんだ、という説のほうが有力です。村落共同体というためには、村落の共有地とか、日本でいうと入会地だとか、そういうものがあって、共同体を共同体たらしめている。しかし中国には、そういう村としての共有地とか共有林はない。ただし、配付資料に書きましたように、華南、福建とか広東ですと、一つの村が一つの姓、ひとつの宗族から成り、宗族という父系の同族集団がひとつの村全体を占めている。あるいはふたつぐらいで一つの、二姓だけで一つの村を構成しているものがかなりある。そして父系の先祖をまつる宗祠やそれに付属する祭田、先祖の祭りのための土地を持ち、又、一族の科挙受験生のための学田、つまり科挙試験を受ける者の学生をつづけさせるための土地があり、それらを貧しい同族の農民に耕させるとか、そういう宗族による共同体、地縁的な共同体というよりは、かなり血縁的共同体に近いものが華南などにあります。そういう大宗族はともかくとして、例えば華北ですと、いくつもの小さな宗族で住み分けていて、その代表者たちで村を運営していくというのがある。しかしそこでは、とても有力宗族のような相互扶助の機能は果たせない。ですから、共同体が農民たちの生活を安定的に維持していく機能とい

うのは、少なくとも村落共同体としては果たせない。そういうものがない。

特に18世紀のなかば以来の中国では、ものすごい勢いで人口が増えている。これは世界でも例がないのではないかとと思われる。王朝時代の中国の人口統計は、必ずしもそう信用できるわけではない。完全に王朝が下まで把握しているかどうか、疑問の余地はある。しかし、先程の宗族が持っている族譜という系譜をみただけでも、この18世紀前半から19世紀半ばにかけての中国の人口増加というのは、世界でも例をみないほどだ、ということがうかがわれる。清朝が徴税対象として把握している人口数が、家族を含めて18世紀初めの1億そこそこから、19世紀半ばには4億になる。同じ時代の日本はほぼ3千万で止まっていることと比較して、アジアでも例外的です。これは、ひとつは大きな戦乱がこの18世紀の、特に後半の時代にはなかったことによる。それから、ラテンアメリカからトウモロコシとか、サツマイモとか、カボチャとか、そういう作物が入り、かなり広い地域に広がっていく。さらに高粱というのは、わりに強い作物で、それが華北に広がっていくということが大きかったのだろうと思うが、とにかくものすごい勢いで人口が増えていく。

しかし耕地は増えない。可耕地はそろそろ限界にきていた。それで18世紀後半以降、特に19世紀に入って非常に多くの農民、特に華中・華南の農民が、生活できなくなって村から弾き出されてくる。つまり階層的な流動性が空間的な流動性をつくりだす。中国農民のそういう流動性は日本人の想像を絶する。それから斯波さんが専門ですけど、中国ではかなり早い時期から華僑という形で、禁令があってもかなり多くの者が東南アジアに出る。台湾なども、行ってはいけないことになっていたのですが、18世紀になると、福建南部の者や広東の客家がどんどんどんどん入っていく。それから満洲地域も、清朝発祥の地域だから移住が禁止されていたが、山東の貧しい農民がどんどん入ってしまう。また沿海地域から四川、雲南、貴州へと、どんどん流動していく。彼らは、多くは安定した村など作れない。太平天国発祥の地である広西をみますと、しょっちゅう集団どうしの武力抗争が起きる。後から入ってきた客家と、もともからいる集団間の抗争です。後者も実は入ってきた人達ですが、より早く入ってきた本地人という人達です。これらが婚姻の問題だとか、土地問題だとか、水などの問題で、ひじょうに大規模な、械闘という武力抗争を起こしている。

太平天国には、この械闘に破れた客家の農民がひじょうにたくさん入ってきております。この太平天国の広西での挙兵当時は一万から二万くらいでした、しかも女もいた。女だけの軍隊を作っている。めずらしいんですが、これは客家だからです。客家だけは女性が纏足しない。後から山間地域に入ってきて、男は出稼ぎに行っている者が多いから、客家の女性は纏足しない。しかも一族の誰かが反乱に参加すれば、家族全部殺されますから、老人から子供から女性から全部軍隊に入っている。それで男子軍、女子軍というのをつくりまして、亭主でも女子軍を尋ねていく場合には、5メートルくらい離れて大きな声でしゃべらんといかんという厳しい男女隔離の制度、性のモラルを作っている。客家には、女性が纏足しないという習慣と同時に、割に男と女が直接話してはいかんとか、物の受け渡しを直接やってはいかんというのが、また

習俗としてあったらしい。また客家には、一種の共有制の下で暮らしているところもある。後から入ってきて、共同体をつくっていかないと生きていけませんから。そういうものが、だいたい太平天国の制度の中には入っていきます。戦闘に勝つと褒美に犬の肉を与えるという規定がある。客家は犬食文化をずっと維持してきたからです。太平天国軍が行った所は、犬はいなくなってしまうという記録もある。食っちゃうわけです。

太平天国は天朝田畝制度という土地の共有制、財産共有制を規定したユートピア制を出すわけです。その中には、「犬を養え」というのがある。これは食うための犬なんです。そういう規定が入っている。だから、ひじょうに多くの客家の生活習慣が入って生きているのがわかります。いずれにしても、中国社会が持っている想像を絶するような流動性というものがあるから、農民として救済されるということは、なかなか出にくい。ひじょうに出にくい。同時代の日本の民間宗教、先程の天理教とか、それから、黒住教とか、そういうもののあり方と比べますと、あるいは日本の百姓一揆と比べても、やはり中国の異端の民衆宗教はかなり違う。

18世紀後半以降に生まれた日本の民間宗教には、中国の白蓮教や上帝教のように反乱と結びついたものはない。一種の平等指向は、新しい民衆宗教には程度の差はあれ、皆あるけれども、むしろひじょうに強く日常的な生活倫理を、どの江戸時代の日本の民間宗教も強調する。勤勉の徳とか、貯蓄とか、正直とか、そういうことがある。これは中国の同時代の異端的な宗教では、みだることがない。彼らの戒律では、先程いった劫について、ひじょうに切実な叙述は経典にある。これは日本と比較にならないくらい、リアリティーを持っていた。黄河の大氾濫が一度あれば——今年も長江がだいたいあぶなかったようですが——想像を絶するすごい災害が起きる。だから劫、末劫というのはたいへんなリアリティーをもっている。日本の場合には弥勒信仰はあるけれども、末劫という観念はなかったようです。日本では弥勒の世というのは豊作の世のイメージです。

もうひとつ、日本の百姓一揆の中で農民が、「侍、侍と威張るな。お前たちが生きていけるのは、我々百姓のおかげじゃないか」という形で、農民としての誇りがはっきりと出ている。そういうものがずいぶん日本の百姓一揆には多い。あるいは中国の場合には、農民が一般に文字表現ができないということもあるのかもしれない。つまりだいたい中国の文献は文字を書ける人、つまり読書人、地主、せいぜい中農の上層以上の人ですから、農民自体の文献というのがないということも、あるいはあるかもしれない。しかし少なくとも僕が見た限りでは、そういう農民としての誇りの上に立って官僚たちを批判したような文献は見たことがない。そういうものが出れば、また考え方をえざるをえないのですが。ですから、さきほど述べた中国社会の特質、構造上の特質というものが、農民戦争とは厳密には言えない民衆反乱のあり方を生み出した、というのが僕の今の考え方なんです。そしてまた繰り返し繰り返し、同じような王朝体制が再生されてくる一つの根拠は、やはり中国の、今簡単に申し上げたような構造上の特質、つまり構造を構成する要素はそれぞれ大きな流動性を持ち、これが一種の全体的な柔構造を創り出してきた、ということから来ているのではなかろうか。

現在の中国の革命の場合、初めて地主制というものを中国の進歩を妨げて来た主要なもの、つまり封建制だと意識した。これを覆して土地改革をする。その上に中国共産党の政権はできたと思う。しかし現実にとこまで本当の、いわば民自身の政権としてつくられたのかということになると、まだまだ、恐らくこれからの課題でしょう。あの政権ができた当時、多くの農民たちは、毛沢東は真命天子だ、つまり天から本当の天子としての命を受けた人だ、というのが農民の中に広がっていたと思う。今でも時々出てくるんです。今の共産党の政権を批判する動きの中で、真命天子が出現したと。それに共産党の末端幹部までが引き入れられてしまうという事件が時々摘発されたりして出てくる。だから今まで述べてきたような特質を持ってきた中国社会の構造が根本的に変わってくるには、まだ色々な過程がこれからも必要なのではないかと、今思っています。雑駁な話で申し訳ありませんが、以上で終わります。